ちょっと名大史

209

名大生の伊勢湾台風被災者救援活動

ちょうど60年前、1959（昭和34）年9月26日から27日にかけて猛烈で超大型の台風が日本列島を襲い、5,000人を超える死者・行方不明者を出すなど、東海地方を中心に甚大な被害をもたらしました。この伊勢湾台風の被災者救援活動において、名大生をはじめとする学生たちが大きな役割を果たしたことが知られています。

名大では、早くも9月28日に学生大会が救援活動への積極的な参加を議決し、その翌日には教養部学生災害対策本部が結成されて、この救援活動に参加した学生は延べ3,000人にのぼりました。その活動は、運搬・連絡から遺体の収容といった過酷なものにまで及び、学生たちは連日、泥海と化した被災地で苦闘しました。

医学部の学生は、9月29日に学生災害対策本部を設置し、医療班を編成しました。同班は名古屋市で最も被害が大きかった南区の各避難所で活動を行うとともに、附属病院の救護班や被災地の病院などの支援にあたりました。

さらに名大生たちは、行政の救援活動に飽き足らず、10月初めに「泥の会」を組織し、南区道徳橋に現地センターを設置して独自の活動を展開しました。また、12月には、日本福祉大の学生たちと共に、南区弥次衛（やじえ）町に臨時保育所（ヤジエセツルメント）を設立して、貧しい被災家庭のための活動を行いました。

1960年2月実施の名大生へのアンケート調査によると、回答者1,162人のうちの76％が何らかの救援活動に参加したと答えています。また、その救援活動参加者の67％が被災者でした。名大生の多くは、災害に遭いながらも救援活動をしていたのです。

名大生の救援活動は大きな共感を呼び、多くの被災者から感謝の手紙が寄せられました。また、こうした活動に結集した学生のエネルギーが、翌年の安保闘争で噴出した側面も指摘されています。

1　1959年12月26日に開催された伊勢湾台風義援金募集の音楽会のポスター（53.5 cm × 38 cm）。伊勢湾台風のために中止された秋の文化祭に代わるものとして、名大の4つの音楽サークルが自主的に計画した。音楽会の純益金は、全て義援金として日本赤十字社に寄託された。
2　名大医学部の伊勢湾台風被災者救援活動。
3　伊勢湾台風被災者を手当てする名大医学部の学生。
4　毎日新聞社会事業団の診療班員として被災者の救援活動に参加し、感謝状と記念品を贈呈された名大医学部学生会の学生たち（1959年10月）。

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

名古屋大学基金のご案内　名古屋大学が優れた人材輩出や世界的な研究成果により、今後も日本や地域に貢献し続けるには、安定した独自財源が必要です。「名古屋大学基金」はその基盤であり、皆様からのご寄附を、さまざまな事業に活用させていただきます。何卒ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

人を伸ばす、明日を創る、世界と歩む
NAGOYA UNIVERSITY プロジェクト NU MIRAI

特定基金　名古屋大学基金の中には、研究推進や人材育成など、支援目的を特定してご寄附いただける事業もご用意しております。

ご寄附のお申込み、お問い合わせはDevelopment Office（DO室）あて（電話052-789-4993、Eメールkikin@adm.nagoya-u.ac.jp）にお願いいたします。

■ 詳しくはホームページをご覧ください。
名古屋大学基金　http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/kikin/
アクセスはこちらから